

## Safety Report

## セーフティルポ 子ども

## 小学校入学直前の幼児とその保護者が一緒に学ぶ交通安全教室

3月8日、新潟県新発田市立米子保育園で同市の交通安全指導員が4月から小学生となる年長クラスの園児10人とその保護者を対象に親子交通安全教室を実施した。

同園園長の五十嵐由紀子さんは「親子で交通ルールを再確認してもらうことを目的としていますので、仕事がある保護者の方にもできるだけ都合をつけて出席してもらいようをお願いしています。保護者と一緒に『交通ルールを守る』という約束をすることにより、子どもの印象に残りやすいと考えています」という。

交通安全指導員は、横断歩道の正しい渡り方を説明。横断歩道の前に来たら、まず止

まる。そして、手を上げて、右、左、右を確認してクルマなどが来ていなければ渡る。「子どもの視野は大人より狭いので、左右を確認する時は顔だけを向けるのではなく、おへそまで左右に向けているか注意してあげてください」と交通安全指導員が親子にアドバイスした。教室に用意された模擬の横断歩道を使って、親子で正しい渡り方を練習してもらった。

この後、教室を出て、子どもたちが卒園後に通う新発田市立米子小学校まで移動（同小学校は保育園の隣にある）。校門の前にある実際の横断歩道を親子で渡るのである。子どもたちは保護者と手をつなぎ、教

室で練習したことを繰り返し行った。最後に園長の五十嵐さんは「小学校入学までに、必ず親子で自宅から小学校まで歩いて往復して、お母さんやお父さんのことばで通学路の危険箇所を教えてください。通学するのは天気の良い日だけではありませんから雨の日にも一緒に歩きましょう。晴れている日にはわからない危険に気づくことができると思います。お子さんも、ランドセルを背負った状態で傘をさすという経験ができます」と保護者に要望した。

参加した保護者からは「仕事の関係で子どもと関われる時間が少ないので、今日は一緒に学べて良かった」「私自身も道路の渡り方を練習することができ、家庭での指導に活かしたい」「今度、自宅から小学校まで子どもと歩いてみます」という声が聞かれた。交通安全指導員の平野マリ子さんは「幼児の交通安全教育の要は保護者です。保育園を通じて、この時期の交通安全教室には、できるだけ保護者の方の参加を促してもらっています。子どもたちには交通事故の被害者にも加害者にもなってほしくありま

せん。そのために、幼児の段階から『命を大切にできる気持ち』を育てられる指導をめざしています」と話す。木川きよみさんは「私たちの指導を保護者の方にご覧いただくことで、少しでも安心感につながればいいと考えています。この機会に、保護者の方も正しい交通ルールを再確認し、子どもの前で常実践してほしい」と語る。



米子小学校の校門前の横断歩道は登下校の際に子どもたちが必ず利用する



新発田警察署の警察官も安全の確保に協力



新発田市立米子保育園園長の五十嵐由紀子さん（中央）、新発田市交通安全指導員の木川きよみさん（左）、平野マリ子さん（右）



新発田市交通安全指導員が参加した親子に正しい横断歩道の渡り方を伝えた



手をつなく時は、子どもの手首をつかむようにアドバイス



模擬の横断歩道を使って、親子で正しい渡り方を練習

## Close Up

## クローズアップ 福祉安全運転

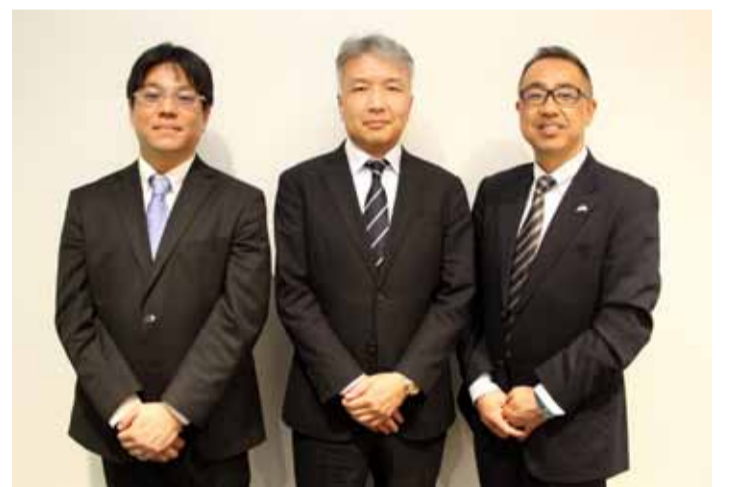
## 運転補助装置メーカー3社とHondaによる合同安全啓発「わたくしたちからみなさまへ『手渡しの安全』」

Hondaは(有)フジオート、(株)ミクニライフ&オート、(株)オフィス清水の3社と合同で、クルマに運転補助装置※の取り付けを検討しているお客様に対する安全啓発活動「わたくしたちからみなさまへ『手渡しの安全』」を4月から開始した（～9月末）。お身体の不自由な方の運転に関する情報は入手しにくい状況といえる。そこで、Hondaと3社は、ご自身に合ったクルマや運転補助装置の選択方法、運転免許試験場（センター）での適性相談、任意保険の事前告知義務、クルマに乗って「ご自身を知る」機会といった情報をまとめた安全啓発チラシを作成。3社を通じて、各メーカーの販売代理店などから安全啓発チラシを配付し、お客様の安全意識の向上に役立ててもらった。お身体が不自由でも、運転補助装置を活用すればクルマの運転ができるようになる方もいる。しかし、そうした方の多くは正しい知識や情報を知らないために「クルマを運転す

る」という考えにいたらない現状があると、(株)ミクニライフ&オート代表取締役社長大西浩樹さんはいう。「多くの方に運転する楽しさを伝えたいと、私たちは考えています。運転できるようになることは身体障がい者の自立にもつながりますが、それを前向きにとらえていない方もいます。身体障がい者の運転について、健常者にも理解を深めてもらうことが必要です。今回の活動は、そのきっかけづくりになると大きな意義を感じています」。

(株)オフィス清水代表取締役 清水深さんは、高齢かつ障がいをお持ちのお客様が増えていると実感している。「若い時に健康でも、高齢になれば様々な病気などでお身体が不自由になる可能性があります。健常者も他人事ではなく、自分や家族の将来のこととして考えてほしいと思います。脳卒中で身体に軽い麻痺が残るようなケースでは、運転補助装置を使わずに無理して運転して

写真左から(有)フジオート代表取締役 杉山光一さん、(株)ミクニライフ&オート代表取締役社長 大西浩樹さん、(株)オフィス清水代表取締役 清水深さん



しまう方がいます。このような方に運転補助装置を活用してもらうにはどうすべきか、合同安全啓発の結果をふまえて検討していく予定です。

(有)フジオート代表取締役 杉山光一さんは「もしハンディのある方が運転するクルマの事故が多くなれば、クルマの運転は敬遠されてしまいます。逆に、安全に運転できることが理解されれば、移動手段として活用されていくでしょう。安全に関する活動を社会にアピールしていくことは重要です。今、高次脳機能障がいになった方の運転再開において、医師や作業療法士による認知・判断の領域での取り組みが進んでいます。運転は認知・判断・操作で成り立っていますから、私たちが操作の領域でサポートでき



運転補助装置の取り付けを検討しているお客様に配付する安全啓発チラシ

れば、社会として大きな流れを生み出せると考えています」と話す。

「Hondaと連携することで自動車業界、さらには国を動かしていける可能性があります」と、3社はお身体の不自由な方が運転するための環境改善へとつなげていく考えだ。

※運転補助装置＝お身体の不自由な方が自分でクルマを運転するために必要となる装置。両足が不自由な方が手でアクセル・ブレーキ等の操作ができる手動運転補助装置などがある。